

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

若いころ私は、偉い先生の下請けをして、いくつかの百科事典の執筆をやった。申し訳ないが、あれは今から思えばありがたい勉強になった。百科事典の執筆はたいいてい、項目ごとに「何行」と指定されるが、一般に、何行とか何字とか何枚とかいう、きびしく制限されたわくの中で、意味のある、そして分かる文を書くには、的確なことを的確に言わなければならなくて、あの執筆は私にそういう勉強を強いてくれたからである。どの項目についても、まずはじめに、何を書くかを決めるわけだが、これは何を書かずにおくかということと裏腹の課題で、実際には、どんなに手短かに言うにしても、これだけはぜひ言わなければならないことは何かを決めることになる。そして次に、それについて手短かに、しかし分かりやすい文で書くのだが、この「手短に」と「分かりやすく」というのは、ほとんどつねにたがいに矛盾する要求である。分かりやすさを心がけると口数が多くなりがちであり、「手短」ばかりを努力すると、書いた本人は分かるつもりでも、他人が見るとさっぱり分からない文章になりがちだからである。

これだけ苦労しても、書いた文章に言葉のむだはまだあるもので、それを削る。とはいっても、多くの場合、書いた本人はそのむだに気がつきにくい。とくに多いのは重複、つまり、Aの文とBの文では、言い回しこそ違っているが、言われている意味はそれほど違わないという場合だが、これはがいして、書いた本人はいい気分で、我ながらよく書けたと思っている箇所に多いものである。単語に関していえば、むだになりがちな語の筆頭は形容詞と副詞、とくに副詞で、中でも「たいへん」とか「非常に」とかいうのは、ほとんどの場合捨てることができる。

こうして言葉を削って、このことについてこれだけの字数で言うには、こう書くほかは書きようがない、というところまでもっていく、つまり抜き差しならぬ文章を仕上げる(ただし、抜き差しならぬ文章はすばらしい文章だが、別の見方をする、遊びのない文章でもあるので、読者を疲れさせてしまうことがある。そこで小説やエッセイ、学校の講義などでは、わざとむだな言葉やむだな文章をちりばめたり、言葉を変えて同じことを繰り返し述べたりすることがある)。

音読に耐える文章を書くというのも大事なことである。「音読に耐える文章」とは、声を出して読むとすらすらと気持ちよく読める文章、あるいは、それを人に読んで聞かせるだけですんなり分かってもらえる文章のことだが、そういう文章の要素として大事なものはリズムだと思う。西洋のレトリックの伝統において重要と考えられていることのひとつに、「散文といえどもリズムがなければならぬ」というのがあって、アリストテレスにすでにその発言がある。もちろん、「リズムがなければならぬ」といっても、定型詩のように一定の韻律をもてということではない。他の点では詩になっていない文章をあえて定型の韻律、日本でなら例えば七五調にのせると、詩でも散文でもなく、阿呆陀羅經になる。そうではなくて、ある文章を気持ちよく読めたとき、この文章にはリズムがあつたなと気がつく、そういうようにリズムがあるべきだということである。こういうリズム感を身につけるには、古来名文のほまれ高い文章を音読する、というのが私が若いころよく薦められたことで、例えば『平家物語』や『太平記』、漢文なら『春秋左氏伝』、英語なら Gibbon の *Decline and Fall of the Roman Empire* だった。これ以外にもはんたるべき文章はあるにちがいないが、何をはんとするにせよ、大事なものは「音読する」ということである。今の日本語は音声面を無視しすぎていて、そのために文章に生気が乏しいのだと私は思っている。

しかし、言葉のリズムに関してさらに重大なのは、木下順二「古典を訳す」が提出した疑問である。——『平家物語』巻四「橋合戦」の一節、

大音声をあげて名乗りけるは、「日ごろは音にも聞きつらん、今は眼にも見給え。三井寺にはその隠れなし。堂衆の中に筒井の浄妙明秀という一人当千の兵ぞや。われと思わん人々は寄り合えや、見参せん」。

というのを、近ごろはやりの「現代語訳」をして、

大声をあげて名前を告げていうには、「ふだんは評判でも聞いていたろう、今は眼でよく見なさい。三井寺では私を知

らぬ者はない。寺僧の中の、筒井の淨妙明秀という、一人で千人をも相手にするという強い男だぞ。われこそと思うような人は集まってこい、対面しよう」。

と訳したら、これは訳したことになるかという問題である。なるほどわれわれ現代人には「現代語訳」の方が分かりやすいかもしれない。しかし原文がもっているろろうとした響きとリズム、そしてその響きとリズムによって、文が力強く読者にせまってくるきんぱく感、そういうものはこの「現代語訳」では完全に消えている。そういうものを消してしまった文章で『平家物語』を読んで、そこに何が言われているか分かったとしても、それで『平家物語』を読んだ、あるいは理解したことになるかということである。⁽²⁾ むろん、なるわけはない。文というものは分かりやすくなければならないが、さりとて、分かりやすければそれでいいというものではないということの、みごとな例だと言える。分かりやすいだけの文には言葉の生命がない。言葉というものは、意味を伝えるだけに終わるものではないからである。だからそんな文章を聞かされると、ああそうですかとしか言いようがない。よく「文学的表現」というけなし言葉が使われている。これはどうやら、簡単なことを飾り立てて言い、 まっすぐなことをねじったり曲げたりして言うことを意味するらしいが、そんなことを言うのは、⁽³⁾ 文学についての無知の表白であるばかりでなく、言葉で本気になつて苦労したことがない証拠でもある。言葉を言葉として十分に使いきる、つまり、言葉がもっているあらゆる能力を発揮させることこそ文学の最も重要な仕事なので、たとえ学術論文でも、少なくとも人文系の論文の文章は「文学的」であるべきだというのが私の意見である。

(柳沼重剛「書き言葉について」より)

問一 傍線部(ア)く(オ)のひらがなを漢字に改めよ。

問二 傍線部(1)「ありがたい勉強になった」とはどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(2)「むろん、なるわけではない」と筆者が考える理由は何か、説明せよ。

問四 傍線部(3)のように筆者が考える理由は何か、説明せよ。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

しかし人間というのは気まぐれなもので、人間の遊びは、決して玩具^{がんぐ}によって百パーセント規定されるものではないのである。これは大事なことだと思うので、とくに強調しておきたいが、玩具のきまりきった使い方を、むしろ裏切るような遊びを人間は好んで発明する。そもそも遊びとは、そういうことではないかと私は思うのである。たとえば、汽車や自動車の玩具があったからといって、私たちはそれを必ずしも汽車や自動車として用いるとはかぎらない。もし戦争ごっこをやりたいと思えば、その汽車や自動車を敵の陣地として利用するかもしれないし、お医者さんごっこをやりたいと思えば、それを医療器具として利用するかもしれないのである。玩具がいかに巧妙に現実を模倣して、子供たちに阿諛^{あゆ}追従しようとも、子供たちはそんなことを屁^へとも思わず、平然としてこれを無視するのだ。

すべり台は、必ずしもすべり台として利用されはしない。私の家にも、かつて屋内用の折りたたみ式の小さなすべり台があったものであるが、私はこれをすべり台として用いた記憶がほとんどない。あんなことは、子供でもすぐ飽きてしまうのである。私の気に入りの遊び方は、すべり台のすべる部分と梯子^{はしご}の部分とをばらばらに分解して、すべる部分を椅子の腕木の下に通し、それとT字形に交わるように梯子を設置して、飛行機をつくることだった。飛行機ごっこをすることだった。つまり、すべる部分が翼であり、梯子の部分が胴体なのである。梯子には横木がいくつもあるから、そこに腰かければ数人の子供が飛行機に乗れるのである。このアイデアは大いに気に入って、私はすべり台を私の飛行機と呼んでいたほどだった。ポードレールにならつていえば、⁽²⁾「座敷の中の飛行機はびくとも動かない。にもかかわらず、飛行機は架空の空間を矢のように速く疾駆する」というわけだ。

子供たちはしばしば、玩具の現実模倣性によって最初から予定されている玩具の使い方とは、まるで違う玩具の使い方をする。もう一つ、私自身の経験を語ることをお許しいただきたい。私は三輪車をひっくりかえして、ペダルをぐるぐる手でまわして、水屋ごっこをやって遊んだことを覚えている。いまは電気で回転するらしいが、かつては水屋では、車を手でまわして

水を掻いたのである。

ここで、この私のエッセーの基本的な主題というべきものを、ずばりといっておこう。すなわち、「玩具にとって大事なものは、その玩具の現実模倣性ではなく、むしろそのシンボル価値なのである。この点については、いくら強調しても強調しすぎることはないまい。玩具は、その名目上の使い方とは別に、無限の使い方を暗示するものでなければならぬだろう。一つの遊び方を決定するものではなく、さまざまな遊び方をそそのかすものでなければならぬだろう。すべり台にも、三輪車にも、その名目上の使い方とは別に、はからずも私が発見したような、新しい使い方の可能性が隠されていたのだった。つまり、これらの玩具には、それなりのシンボル価値があったということになるだろう。

私の思うのに、玩具の現実模倣性とシンボル価値とは、ともすると反比例するのではあるまいか。玩具が複雑こうち巧緻こうちに現実を模倣するようになればなるほど、そのシンボル価値はどんどん下落するのではあるまいか。あまりにも現実をそっくりそのままに模倣した玩具は、その模倣された現実以外の現実を想像させることが不可能になるだろうからだ。その名目上の使い方以外の使い方を、私たちにそそのかすことがないだろうからだ。そういう玩具は、私にはつまらない玩具のように思われる。

(濫澤龍彦「玩具のシンボル価値」より)

問一 傍線部(1)「阿諛追従」とはどういう意味か、文脈に即して説明せよ。

問二 傍線部(2)の内容をわかりやすく説明せよ。

問三 筆者は「玩具のシンボル価値」について、どのように考えているか、説明せよ。

三

次の文章は、後鳥羽上皇に仕えた源家長の日記の一節である。上皇の寵愛していた更衣が、皇子(若宮)を出産後まもなく死去し、上皇は深い悲しみに沈んでいた。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

年月の経るに添へて、つゆ忘れさせ給はぬ御気色の、⁽¹⁾ときどき漏り出でさせ給ふこそ、あらはに心苦しく見えさせ給へ。京へ帰らせ給ひて後に、若宮の参らせ給へりしこそ、「御忘れ形見もなかななる御もの思ひの催しぐさなりや」と、おぼしめすらむかし。今日ことさらこと忌みさせ給ふべきを、⁽²⁾なにとなき世のあはれさは、え念ぜさせ給はずや侍りけむ。若宮参らせ給ふなど聞き侍りし日は、何心なき若人たちまで、「いかにあはれにおもほし出づらむ」と申し合ひて、うちしめりて侍るめり。まいて、見参らせ合はれけむ女房たちなど、さぞあはれにおぼしめされけむ。⁽³⁾かかる別れの道は、憂き世のならひなれば、日数経る間に思ひ遠ざかり、忘れはてさせ給ふべかめるを、折につけたる御遊びの隙々にも、^(ひまひま)「年に添へて忘れがたきなど、御物語のついでにも承る事侍りき。

(『源家長日記』より)

注(*)

こと忌み || 不吉な言行や涙などを慎むこと。

問一 傍線部(1)~(3)を、適宜ことばを補いながら、現代語訳せよ。

問二 傍線部Aはどのようなことをいっているのか、説明せよ。

問題は、このページで終わりである。